

太田：援助要請態度と気質との関連性

援助要請態度と気質との関連性

太田 仁*

The relationship between help-seeking attitudes and temperament

Jin OTA

要 旨

本研究の目的は、計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior; Ajzen, 1991) にそって、援助要請行動の過程を整理し、自殺予防の一助とすることである。本論文では、その一環として援助要請意図の先行要因である「統制認知」に関する遺伝的要因である「気質」による態度への影響を明らかにすることを目的におこなわれた調査結果を報告する。

援助要請態度は、援助要請における過去の経験や認知、更には行動の評価により形成される変数であり、計画的行動理論においては、意図さらには行動への循環的影響を有することから従属変数として選択された。

気質の測定には、Gray (1970, 1981, 1982, 1987) の強化感受性理論 (Reinforcement Sensitivity Theory) に基づき Carver & White (1994) が作成した BIS/BAS Scales の日本語版 (高橋ら, 2007) を用いた。

女子大生 70 名を対象とした質問紙調査の結果、行動を抑制する不安特性である BIS は、肯定・否定両援助要請態度と破壊表出に有意な影響過程を示し、衝動的特性である BAS の下位因子である駆動からは肯定的援助要請に対し負の影響過程、報酬からは正の影響過程を示した。

キーワード：援助要請態度、被援助指向性、自殺の対人関係理論、気質、計画的行動理論

I はじめに

人は、社会的動物と言われ、個々の資源を交換する支え合いにより社会を形成する。資源の交換は、援助の授受に換言できる。すなわち援助を求める要請行動 (help-seeking behavior)、援助を与える (help-giving behavior) 行動、そしてその援助を受け容れ、それに応じる (help-receiving and reaction to help) 行動である。個々人の有する物理的・社会的資源の過不足のない円滑な交換により、支え合える対人関係に基づく互惠的社会が実現されると言えよう。

2019年9月18日受理 *社会学部心理学科教授

II 問題

対人相互作用のダークサイド

しかしながら他者との相互作用は、恩恵ばかりではなく、拒絶や排除さらには攻撃、搾取といった社会的葛藤 (social conflict) ももたらす。集団からの排除は個人の対人態度を消極的 (pessimistic) にさせ、学習された無力感 (絶望) は個人に希死念慮や自殺念慮をもたらす。Joiner (2005) の自殺の対人関係理論 (Interpersonal theory of suicide) は、所属感の減弱、負担感の知覚、身についた自殺の潜在能力という三つの要素が高まった際に自殺が生じるとする。所属感の減弱とは、自分は誰にも必要とされておらず居場所がなく孤立感やつながりの欠如を指し、自分が居なくなったり死んでしまったりしても誰も困らないという感覚である。負担感の知覚は、周囲に迷惑をかけてばかりで、自分なんか居ないほうが周りの人は幸せになれるといった言わば自分は厄介者であるという信念や感覚であり、これらの感覚は個人に無力感や、さらには絶望感をもたらし、次第に希死念慮や自殺念慮に支配され死に対する恐怖や感覚を鈍麻させていく。

Van Orden et al (2010) は、対人関係の要因である所属感の減弱や負担感の知覚を悪化させる要因として個人の特性に注目した Beck (1986) の自殺における絶望感理論 (Hopelessness theory) を統合したモデルを提案している。Van Orden et al (前掲) のモデルでは、所属感の減弱および負担感の知覚が絶望感により悪化することで自殺念慮が発生し、自殺念慮が発生した状態で過去の自傷経験などにより自殺の潜在能力が十分高ければ致命的な自殺企図が生じると考える (図1 参照)。

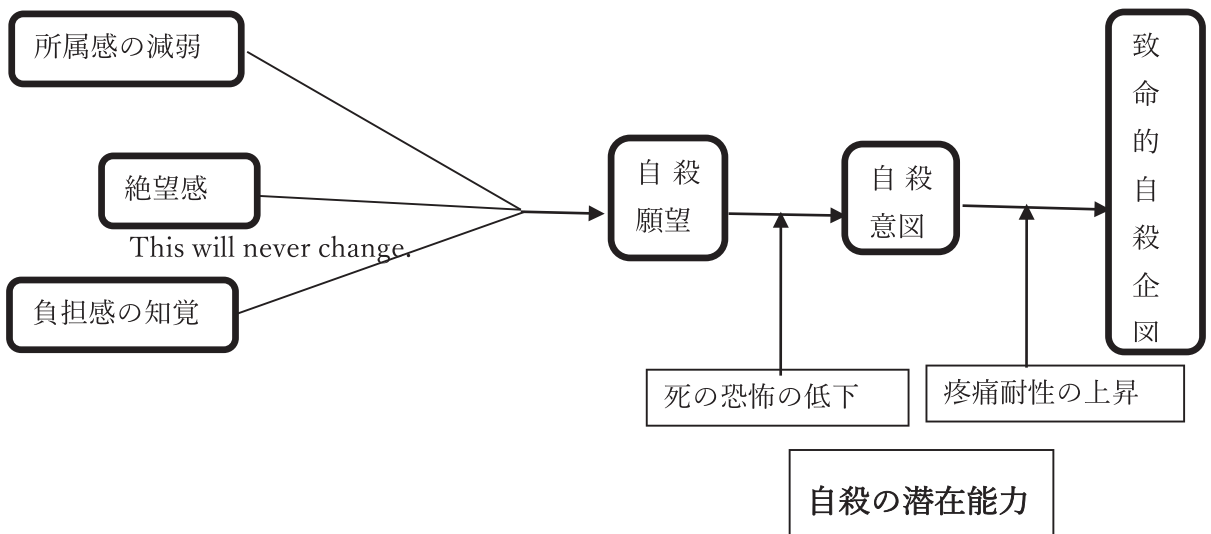


図1 自殺企図のプロセス・モデル Van Orden KA, et al (2010)

学習性無力感 (セリグマン, 1985) は、日常の生活状況や対人関係、記憶情報に関する悲観的

な認知 (pessimistic cognition) によって生起し、実際に経験する様々な欲求の挫折や絶望により悲観的な認知が正しいという学習によりが強化される。セリグマン (前掲) の学習性無力感理論では、長期間通常、自己効力感 (self efficacy) の著しい低下を伴うことが指摘されている。その結果、自尊心を低下させ、社会的な役割を担って働くことが出来ない厄介者であるといったセルフスティグマにより自己負債感を強める。

スティグマは周囲からの刷り込みによりステレオタイプの埋め込まれた先入観や偏見、差別的な態度のことを指し、負の烙印ともいわれ、人々から軽視され社会から排除の対象となる社会的規範である。例えば、一般住民の精神障害者への差別や偏見を社会的スティグマ、精神障害者等の本人自身の本人に向けた偏見や差別的態度をセルフスティグマとされる。これらのスティグマにより他者から否定され続け、集団から排除され続けた個人は、人生全般に対する悲哀感や孤独感、対人関係に対する不信感を強めることとなる。

その結果、新たな人間関係の構築に消極的になり、他人の親切や好意を信頼できない人間不信から他者との援助授受についても否定的な中核信念を形成することが予測される。したがって、個人の困窮事態で他者の援助が必要な状況であっても「救われる価値のない自分」、「自分のような人間を救ってくれる人などいない」といった否定的な援助要請態度が形成されることが予測される。

一方、そこで生成された否定的な社会的自己概念は、他者への怒りとなり互恵の関係性を損なう、「破壊的行動」として表出されることも想定され、援助授受をさらに困難にするといった悪循環の要因ともなりうる (Smith, et al, 2006)。

援助要請態度

太田 (2005a) は、援助要請態度について「日常の援助授受の経験を通して体制化された精神的、神経的な援助要請の準備状態であり、他者への援助要請について指示的ないし力動的な影響を及ぼすもの」と定義し、肯定的援助要請態度と否定的援助要請態度に2分し、各々の構造を明らかにした。

太田 (前掲) は、肯定的援助要請態度について、他者への「信頼」「緊急性」「準拠集団で評価が高く、共感的な援助者の認知」「準拠集団での規範としての援助要請勧奨の認知」といった構造が想定されている。

それに対して、否定的援助要請態度は、「他者への不信感」「準拠集団での援助要請に対する否定的評価の懸念」「援助を受けることによる自尊感情への脅威や援助の効果に対する疑念」「セルフスティグマによる問題の甘受や自己隠蔽」といった構造が想定されている。この否定的な援助要請態度を構成する要因には、前述のセリグマン (前掲) による悲観的な認知や対人的な自己効力感の喪失の関連が想定される。

幼少期からの度重なる援助要請の失敗や否定、親の虐待による承認集団からの排除や、教師や級友による学級集団からの排除の経験による対人行動への不安は、自己効力感の喪失へとつながり人と交わることへの不安すなわち社会不安を増大させる。実際他者との相互作用における自己効力感は、社交不安症状である恐怖・不安と回避とも負の関連を示すことが指摘されている

(Gaudiano & Herbert, 2003)。

援助要請態度と類似した概念に、被援助指向性がある。水野・石隈（1999）help-seeking preference を被援助志向性と翻訳し、その定義を「個人が情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めらるかどうかに関する認知的枠組み」としており、その定義から被援助指向性は、援助要請態度等の援助要請行動の選択に関わる意図を示しているといえよう。

具体的に援助要請に関わる意図を示す援助要請に学業的援助要請がある。すなわち、自ら十分考慮しその後の自立のための自立的援助要請と、個人の自省などの省察やその後の自立への展望もなく安易に他者に頼ろうとする依存的援助要請（中谷, 1998）としている。類似した援助要請の概念に永井（2013）の援助要請スタイルがある。すなわち中谷（前掲）の自立的援助要請に相当する「援助要請自立型」、依存的援助要請に相当する「援助要請過剰型」、困難な問題を抱えても、一貫して援助要請を回避する援助要請回避型という3つのスタイルである。永井（前掲）は、中谷の分類と援助要請スタイルとの差異について、援助要請行動の生起プロセスにおける差異を指摘している。援助要請生起プロセスの「問題の知覚」「援助要請の意思決定」「援助要請の実行」3段階（高木, 1997）において前者の援助要請は、安易に援助要請を実行するのか、熟考の後に援助要請を行うのかといった行動段階までを含むのに対して、後者の援助要請スタイルは、援助要請の意思決定後の行動を特定していない点で異なるとしているとしており、援助要請スタイルが行動を選択する際の意図であることを示唆しているといえよう。

一方、援助要請は、直接問題の解決を目標としない意図でも実行されることがある。太田・阿部（2012）では、自律的援助要請、依存的援助要請に加えて他者との関係性を付度する意図でソーシャル・スキルの側面を有する関係志向的援助要請の存在を明らかにしている。これは、その後の援助要請の質を付度することを意図しており、自立的、依存的、回避的意図に先立って日常の相互作用において認知評価基準として意識される。

これらの、学業的援助要請（中谷, 1998）や援助要請のスタイル（永井, 2013）さらには太田・阿部（前掲）の関係志向的援助要請については、行動選択の際の指針を示す「意図」に区分できよう。

気質と援助要請態度及び破壊表出行動との関連性

以上の援助要請に関する様々な研究において、その抑制要因について、デモグラフィック要因、ネットワーク変数、パーソナリティ変数、個人の問題の深刻さ・症状（前掲）が明らかにされている。しかし、個人の認知評価に影響を及ぼす遺伝的特性の影響についてはこれまで議論がなされていない。

先述の態度および上記の気質が行動選択ならびにその実行に影響を与える過程については、Ajzen（1991）の計画的行動理論（Theory of Planned Behavior）にそって整理できる（図2参照）。

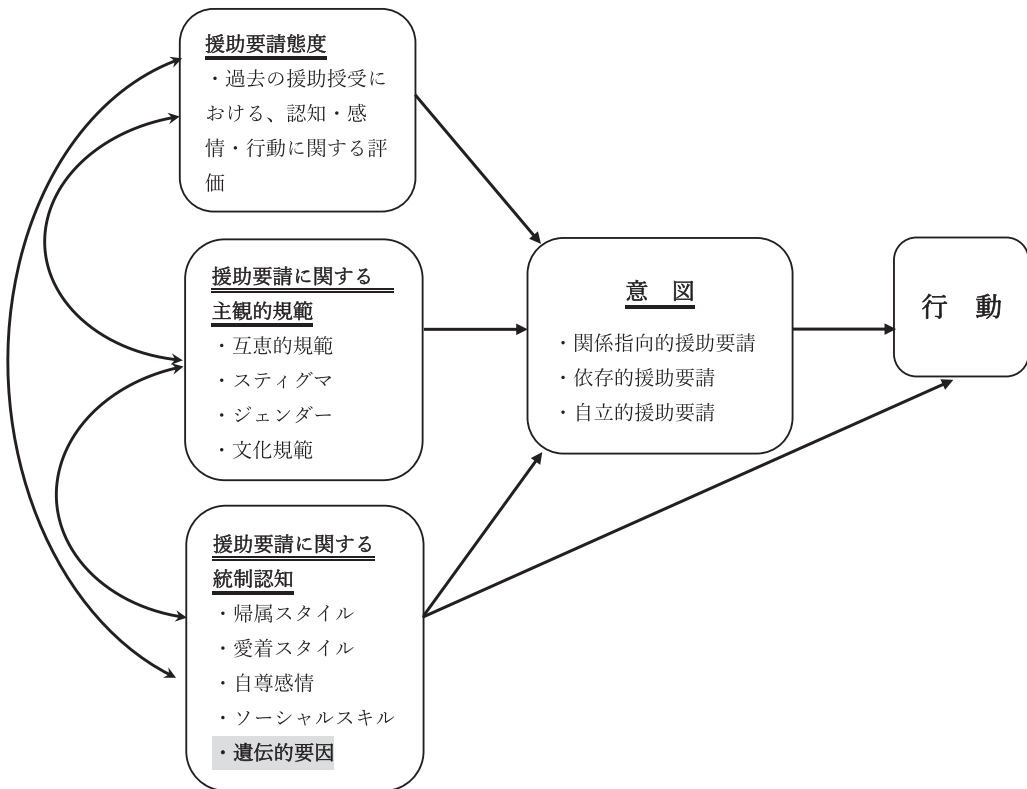


図2 計画的行動理論 (Ajzen, 1991) に基づく援助要請過程

すなわち、関係志向的、依存的、自立的意図の先行要因として、援助要請に関連する態度や規範、統制認知などが想定される。これらの先行要因は、相互に関連することが指摘されており、各関連変数についても有意な相関が示されている (Vogel et al. 2005)。

これらの意図の先行要因のうち「統制認知」については、他の要因と異なり、直接行動に影響をあたえるパスが仮定されている。具体的には、統制認知要因は、意図とは関係なく援助要請行動の促進・抑制要因となることが想定される要因であるといえる。

これまでの統制認知要因については、帰属スタイル (Sheikh & Furnham, 2000)、愛着スタイル (Shaffer, Vogel, & Wei, 2006)、自尊感情、ソーシャル・スキルが想定されているが個人の特性で統制認知の中核的役割を果たす生物学的要因である遺伝特性については、検討がなされていない。

認知評価に影響を与える遺伝的特性である気質 (temperament) は、情緒的刺激に対する感受性、平時における反応の強さと速さ、主な気分の性質、気分の動揺と強度といった特性全てを含む個人の情緒的性質の独特な現象を指す。これらの現象は体質的構造に依存するものと考えられ、遺伝的要因である (Allport, 1937 詫摩他訳 1982, p.44)。

気質による行動説明モデルに、罰の回避の感受性と報酬への接近の感受性という2つの感受性の個人差によって、人間行動を説明する (Gray, 1970, 1982, 1987) の強化感受性理論がある。強

化感受性理論は、行動活性化システム (behavioral activation system: BAS)、行動抑制システム (behavioral inhibition system: BIS) そして闘争・逃走システム (fight flight system: FFS) の3つの脳内の動機づけシステムを仮定している。すなわち、BAS は、報酬に関係するシステムで主に報酬や罰からの刺激により活性化される脳内システムで、このシステムの活性化により目標達成をするための接近行動が引き起こされ、衝動性と要約される Gray (1987a 八木訳 1991)。BIS は新奇性刺激や条件づけられた罰や無報酬の信号によって活性化されるシステムで、このシステムの活性化により進行中の行動が抑制され、潜在的な脅威に対して注意が喚起され回避行動の引き金となり不安に要約される (Gray, 1981)。

FFS は無条件的な罰刺激に対して活性化されるシステムであり、このシステムが活性化することによって防御的な攻撃行動もしくは逃避行動が引き起こされる。この FFS はヒト以外の動物の行動予測にはあてはまりがよいが、ヒトの日常生活においてはそれほど見受けられないために重要視されていないとされている。そのため、この FFS はヒトの気質として評価する場合、BIS に近似するシステムとして評価されている (Pickering et al., 1999)。

BIS、BAS 両システムの感受性には個人差があり、BIS が高い者は、罰への感受性が高く、罰の存在を知らせる手がかりによって行動が抑制されやすい。それに対し、BAS の高い者は、報酬への感受性が高く、その手がかりによって接近行動が容易に起動される。

以上により、本研究は、援助要請における過去の経験や認知、更には行動の評価により形成される援助要請態度に与える生得的特性である気質の影響について明らかにすることを目的におこなわれた。端的に BIS は不安 (anxiety)、BAS は衝動性 (impulsivity) と集約され、援助要請事態を不安と認知すれば BIS が機能し援助要請を回避する意図を反映した援助要請に対する忌避的行動として破壊的表出行動が選択され、一方、報酬と認知されれば衝動的に援助への接近的意図から援助要請行動が選択されるであろう。

III 方法

対象 女子大学に所属する学生 (全員女性) 1年生 20名、2年生 35名、3年生 8名、4年生 7名の70名過半数の回答に不備のあった8名を除いた62名を分析対象とした。

質問紙 気質の測定 BIS / BAS 尺度 (高橋ら, 2007) = BIS 因子から「何かよくないことが起ころうとしていると考えたら、私はたいていくよく悩む」「誰かが私のことを怒っていると考えたり、知ったりすると、私はかなり心配になったり動揺したりする」「何か重要なことをあまりうまくできなかったと考えたら不安になる」「非難されたり怒られたりすると、私はかなり傷つく」「私は、間違いを犯すことを心配している」の5項目

BAS 駆動因子から、「欲しいものがあると、私はたいていそれを手に入れるために全力を挙げる」「私は、欲しいものを手に入れるためには格別に努力する」「欲しいものを手に入れるチャンスを見つけると、すぐに動き出す」の3項目

BAS 報酬刺激探求因子から、「何か好きなことをするチャンスを見つけると、私はすぐに興奮する」「競争に勝ったら私は興奮するだろう」「私は、欲しいものを手に入れたとき、興奮し、活

気づけられる」「よいことが私の身に起こると、そのことは、私に強い影響を与える」の3項目

BAS 刺激因子から、「楽しいかもしれないから、というだけの理由で何かをすることがよくある」「私はしばしば時のはずみで行動する」「面白そうだと思えば、私はいつも何か新しいものを試したいと考えている」の3項目（各々原尺度因子負荷量の高い項目を選定。）について「あてはまらない」から「あてはまる」各4件法にて回答を求めた。

援助要請態度の測定 肯定的援助要請態度の測定には、被援助志向性尺度（田村ら，2001）第1因援助の欲求から「困っていることを解決するために、他者からの助言や援助が欲しい」「自分が困っている時には、話を聞いてくれる人が欲しい。」「困っていることを解決するために、自分と一緒に対処してくれる人が欲しい」以上の3項目。

否定的援助要請態度の測定には、同尺度の第2因子援助関係に対する援助される抵抗感から「自分は、人に相談したり援助を求める時、いつも心苦しさを感ずる」「他人からの助言や援助を受けることに、抵抗がある」「人は誰でも、相談や援助を求められたら、わずらわしく感じると思う」の3項目選定し各項目「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法にて回答を求めた。

怒りの表出行動の測定については、下田ら（2012）による Multidimensional School Anger Inventory 日本語版の第3因子「破壊的表出」「腹がたつとものをこわす」「腹がたつと、泣きわめいたり、暴れたりする」「とても腹がたつと、自分を傷つけたくなる」「腹がたつと、すべてのことがいやになる」といった9項目について「ない」から「いつもある」の4件法の合計得点を測度とした。分析については上記の各下位尺度の合計得点を用いた。

IV 結果

BIS、BAS 駆動、BAS 報酬、BAS 刺激探求、肯定的態度と否定的態度と破壊表出の信頼性係数（ α 係数）と平均値、標準偏差を算出した（表1参照）。

表1 気質と破壊表出・援助要請態度の平均・分散

BIS	BAS駆動	BAS報酬	BAS刺激	破壊表出	肯定的援助 要請態度	否定的援助 要請態度
$\alpha = .799$	$\alpha = .675$	$\alpha = .521$	$\alpha = .722$	$\alpha = .762$	$\alpha = .813$	$\alpha = .814$
mean <i>SD</i>	mean <i>SD</i>	mean <i>SD</i>	mean <i>SD</i>	mean <i>SD</i>	mean <i>SD</i>	mean <i>SD</i>
16.7 2.85	8.33 1.77	9.67 1.56	8.41 2.08	14.74 3.76	8.41 2.08	7.72 2.69

n=60

各測定尺度の信頼性について bas 駆動と bas 報酬が低かったが、他の尺度については、.722-.814 で推移していた。平均値は BIS = 17 / 20、BAS 駆動 = 8.3 / 12、BAS 報酬 = 9.7 / 12、BAS 駆動 = 8.4 / 12 については中央値より高い平均値を示した。援助要請に対する肯定的態度の平均値は 12.9 / 15 と高く、否定的援助要請態度は 7.7 / 15 で、ほぼ中央値であった。自傷傾向の測度として用いた破壊表出の平均値は 14.74 / 36 であった。

次に各変数間の関連性を検討するために、相関係数を算出した（表2参照）。

表2 気質と破壊表出・援助要請態度の相関

	BAS駆動	BAS報酬	BAS刺激	BIS	破壊表出	肯定的援助要請態度	否定的援助要請態度
BAS駆動	1	.458**	.320*	-.019	-.107	-.090	-.072
BAS報酬		1	.412**	.113	-.106	.349**	-.066
BAS刺激			1	-.042	-.088	-.038	-.092
BIS				1	.238	.319*	.260*
破壊表出					1	-.035	.354**
援助欲求						1	-.232
要請忌避							1

*. p<.05 ** p<.01

BAS報酬は肯定的援助要請の指標である援助希求に有意な正の関連性を示した。Bisは、肯定的援助要請態度と否定的援助要請態度の双方に有意な正の関連性を示した。

否定的肯定的援助要請態度は、破壊表出との間に有意な正と関連性を示した。

BAS各因子は統計的に有意な値ではないが否定的肯定的援助要請態度と破壊表出に負の関連性を示した。

次に、気質の肯定的援助要請態度および破壊表出への影響過程を検討するためにBISとBASを構成する「駆動」「報酬」「刺激」の3変数を独立変数とし、肯定的援助要請態度の指標である肯定的援助要請態度を従属変数として重回帰分析を行った（表3および図3参照）。

表3 気質の援助要請態度および破壊表出への影響（重回帰分析）

独立変数	援助要請態度				破壊表出	
	肯定的援助要請態度		否定的援助要請態度		偏回帰係数	標準化偏回帰係数
	偏回帰係数	標準化偏回帰係数	偏回帰係数	標準化偏回帰係数		
BIS	.196	.251*	.253	.266*	.329	.248†
BAS駆動	-.335	-.268*	-.027	-.018	-.105	-.050
BAS報酬	.716	.504**	-.123	-.071	-.248	-.103
BAS刺激	-.158	-.149	-.057	-.044	-.035	-.020
決定係数	.283				.077	
調整済み決定係数	.231				.010	
モデル適合度	p=.001		p=.327		p=.345	
n	59		59		59	

†p<.10 *p<.05 **p<.01

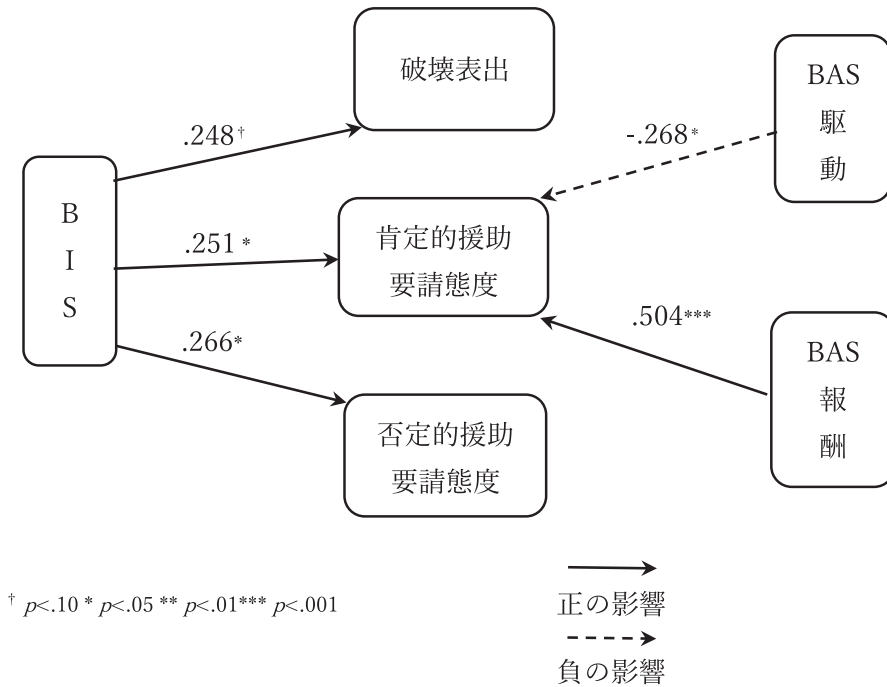


図3 気質から援助要請態度および破壊表出への影響過程
 ※統計的に有意なパスのみ表示

BIS から援助要請に対する肯定的・否定的両態度へ正の有意な標準回帰係数が確認された。また、破壊表出への正の有意な標準回帰係数が確認された

BAS 駆動からは、援助要請態度に有意な負の標準回帰係数が示された。BAS 報酬からは、肯定的援助要請態度に有意な正の標準回帰係数が示された。

V 考察

BAS は、「報酬」から「肯定的態度」へ有意な正の標準回帰係数が確認され、「駆動」からは、肯定的援助要請態度へ負の標準回帰係数が確認された。BAS は、報酬または、罰の不在により活性化される動機づけシステムで、目標の達成に向けて行動を解発する機能を担う (Gray, 1994) ことから、接近は対象に対する行期的認知評価を意味する。下位尺度の「報酬」は、他者との相互作用による報酬の存在や予期に対するポジティブな反応を表す気質であり、援助要請に対する肯定的な予期の認知を促進していると考えられる。一方、同様に BAS の下位である「駆動」は、個人の望む目標への持続的な追求を表す気質である。その特性から援助要請を個人の持続的な追及推進の阻害要因として認知されることが示唆されているといえよう。

BIS は、肯定・否定両援助要請態度と破壊表出に有意な正の影響過程が認められた。BIS の影響が顕現しやすい個人は、各種不安障害や抑うつ的になりやすいと考えられている Pickering et

al. (1999). 当面する援助要請事態が予想通りの場合は、回避傾向は抑制されるが、予想と一致しない場合や予想される援助要請事態が嫌悪的であると予期される場合は援助要請行動を抑制する機能の所在が今回の結果から示唆されたと言えよう。

BIS による、破壊表出行動への影響過程について本研究では、感じた怒りを破壊的行動に表出する頻度を尋ねていることから、たすけを求めることの必要性を感じているものの適切な援助を得られないジレンマにより生成された怒りが破壊的行動として表出されることが示唆されたと考えられよう。破壊表出は、対人関係を悪化させる要因ともなり、集団からの排除や個人の負感の増加、さらには絶望感への悪循環の起点となりうることが想定され、本調査結果は自殺予防に有意な視点を提供すると思われる。

研究結果からは「刺激」から「肯定的態度」への有意な標準回帰係数は確認されなかった。また、気質理論には Gray (1982, 1987) の強化感受性理論に影響を受けて構築された Cloninger の気質理論 (Cloninger, 1986, 1987; Cloninger & Gilligan, 1987) もあり、その測定尺度である Temperament and Character Inventory (TCI) Cloninger, Svrakic, & Przybeck (1993) を用いて併せて検討する必要がある。

また、今回の調査では、気質と援助要請規範との関係及び援助要請意図、援助要請行動への影響過程については明らかにしていない。各要因への影響過程を順次明らかにすることは計画的行動理論 (Ajzen, 前掲) における援助要請行動の精緻化において今後の重要な研究課題である。

参考文献

- Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Process*, 50, 179-211.
- Allport, G.W. (1937). *Personality: A Psychological Interpretations*. Henry Holt and Company. (オルポート, G.W. 訖摩 武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正 (訳) (1982). パーソナリティー—心理学的解釈—新曜社)
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215
- Beck, A. (1986). Hopelessness as a predictor of eventual suicide. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 487, 90-96.
- Joiner, T. (2005). *Why People Die by Suicide*. Cambridge: Harvard University Press
- Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 319-333.
- Cloninger, C.R., & Gilligan, S.B. (1987). Neurogenetic Mechanisms of Learning : A Phylogenetic perspective. *Journal of psychiatric research*, 21, 457-472.
- Cloninger, C.R. (1986). A Unified Biosocial Theory of Personality and its Role in the Development of Anxiety States. *Psychiatric Developments*, 3, 167-226.
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: Freeman. (セリグマン, M. E. P. 平井久・木村駿 (監訳) (1985). うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か—誠信書房.)
- Furnham, A. (2000). A cross-cultural study of mental health beliefs and attitudes towards seeking professional help. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 35, 326-334
- Gaudiano, B. A., & Herbert, J. D. (2006). Self-efficacy for social situations in adolescents with generalized social anxiety disorder. *Behavioral and Cognitive Psychotherapy*, 35, 209-223.
- Gray, J. A. (1982) The neuropsychology of anxiety: An enquiry into the functions of the septohippocampal system. *New*

- York: Oxford University Press.
- Gray, J. A. (1987) The psychology of fear and stress. London: Cambridge University Press.
- Gray, J. A. (1970). The psychophysiological basis of introversion-extraversion. *Behavioral Research and Therapy*, 8, 249-266.
- Gray, J. A. (1982). *Neuropsychological theory of anxiety*. New York: Oxford University Press.
- Gray, J. A. (1987). *The psychology of fear and stress*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Gray, J.A. (1987a). *The psychology of fear and stress*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. (グレイ, J. A. 八木欽治 (訳) (1991). *ストレスと脳* 朝倉書店
- Gray, J. A., & McNaughton, N. (2000) *The neuropsychology of anxiety* (2nd ed.). New York: Oxford University Press.
- Gray, J.A. (1981). A critique of Eysenck's Theory of personality .H.J.Ey senck. (ed.). *A Mode l for personality*. New York:SpringerVerlag.pp.246-276
- Gray, J.A. (1999) 'The neuroscience of personality', in L. Pervin and O. John (eds), *Handbook of Personality* (2nd edition). New York: Guilford Press. pp. 277-299.
- Jerusalem, M., & Schwarzer, R. (1992). Self-efficacy as a resource factor in stress appraisal processes. In R. Schwarzer (Ed.), *Self-efficacy: Thought control of action* (pp. 195-213). Washington, DC: Hemisphere.
- 水野治久・石隈利紀 (1999) 被援助志向性 被援助行動に関する研究の動向 *教育心理学研究* 47, 530-539
- 永井智 (2010). 大学生における援助要請意図 —主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因 *教育心理学研究*, 58, 46-56.
- 永井智 (2013) 援助要請スタイル尺度の作成：縦断調査による実際の援助要請行動との関連から *教育心理学研究*, 61, 44-55.
- 永井智 (2017) 肯定的援助要請態度スタイルと愛着および適切な肯定的援助要請態度行動の関連の検討立正大学心理学研究所紀要 第 15 号 25 - 31 立正大学心理学部
- 中谷素之 (1998). 教室における児童の社会的責任目標と学習行動、学業達成の関連 *教育心理学研究*, 46, 291-299.
- Shaffer, P. A., Vogel, D. L., & Wei, M. F. (2006). The mediating roles of anticipated risks, anticipated benefits, and attitudes on the decision to seek professional help: An attachment perspective. *Journal of Counseling Psychology*, 53, 442-452.
- 太田仁 2005a 肯定的援助要請態度態度に関する実証的・実践的研究 関西大学 博士論文
- 太田仁 2005b たすけを求める心と行動 援助要請の心理学 金子書房
- 太田仁・高木修 2011, 親の肯定的援助要請態度態度に関する実証的・実践的研究 関西大学『社会学部紀要』第 42 巻第 2 号, pp.27-63
- 太田 仁・阿部晋吾 2012 肯定的援助要請態度態度と援助者の探索過程 肯定的援助要請態度態度における関係志向性 第 71 回日本心理学会発表論文集
- 太田仁 2019 「援助をすること、されること、そして援助を求める心と行動」 支えあいからつながる心 第 2 章 対人関係の心理学から ナカニシヤ出版 13-23
- Sheikh, S., & Pickering, A.D. & Gray, J.A. (1999). *The Neuroscience of Personality* .In L.A.Pervin & O.P.John (eds.), *Handbook of Personality* .2nd ed. New York: The Guilford Press. pp.277-299
- Pickering, A.D. and Van Orden, K. A., Witte, T. K., Cukrowicz, K. C., Braithwaite, S. R., Selby, E. A., & Joiner, T. E. (2010). The interpersonal theory of suicide. *Psychological Review*, 117 (2), 575-600.
- セリグマン (1985) (翻訳) 平井久, 木村駿『うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か』誠信書房
- Sheikh, S., & Furnham, A. (2000). A cross-cultural study of mental health beliefs and attitudes towards seeking professional help. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 35, 326-334.
- 下田芳幸・寺坂明子 学校での怒りの多次元尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討 *心理学研究* 2012 年 第 83 巻 第 4 号 pp. 347-356
- Smith, D. C., Furlong, M. J., & Boman, P (2006). Assessing anger and hostility in school settings. In S. R. Jimerson &

- M. J. Furlong (Eds.), *The handbook of school violence and school safety: From research to practice*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 135-145.
- 高木修・太田仁 2010 高校生の学校生活における肯定的援助要請態度 関西大学『社会学部紀要』第41巻第2号, pp.89 - 104
- 高橋雄介, 山形伸二, 木島伸彦, 繁榊算男, 大野裕, 安藤寿康 2007 Gray の気質モデル - BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討 - パーソナリティ研究 第15巻第3号 276-289
- 高木修 (1997) 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21.
- 田村修一・石隈利紀 2006 中学校教師の被援助志向性に関する研究 - 状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 - 教育心理学研究, 54, 75-89
- Vogel, D. L., Wester, S. R., Wei, M., & Boysen, G. A. (2005). The role of outcome expectations and attitudes on decisions to seek professional help. *Journal of Counseling Psychology*, 52, 459-470.

Summary

The purpose of this study is to help prevent suicide by organizing the process of help-seeking request behavior in line with the Theory of Planned Behavior (Ajzen, 1991). The purpose of this paper was to clarify the influence of the “temperament”, which is a genetic factor, on “control cognition”, which is a predecessor of intention, on the social-attitude. Help-seeking attitudes are variables that are formed by past experience and recognition in help-seeking requests, as well as behavioral evaluation, and therefore have a cyclical impact on intentions and behavior in planned behavioral theory. chosen. The Scales Japanese version of BIS / BAS Scales prepared by Carver & White (1994) was based on Reinforcement Sensitivity Theory (RST) of Gray (1970, 1981, 1982, 1987). (Takahashi et al., 2007). As a result of a questionnaire survey of 70 female college students, BIS, an anxiety characteristic that suppresses behavior, shows a significant influence process on both positive and negative help-seeking request attitudes and expression of destruction, and BAS, an impulsive characteristic from its subfactor, driving, showed a negative influence process to positive help requests, and from reward, a positive influence process.

Keywords: help-seeking attitude, help-seeking preference, Interpersonal theory of suicide, temperament, planned behavior theory